

コロナ禍における介護実習代替えとして取組んだ学内実習の検証

Verification of the Care Work Training in School as a Substitute for a Practical Training in the COVID-19 Crisis

浜崎 眞美, 福永 宏子, 庵木 清子, 竹中 正巳, 谷川 知士

Mami Hamasaki, Hiroko Fukunaga, Kiyoko Annoki, Masami Takenaka, Satoshi Tanigawa

鹿児島女子短期大学

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、介護実習Ⅲ及び介護実習Ⅰ－①を学内実習に置き換え実施した。本稿では、学内実習をどのように準備し進めたかの経緯を示すとともに、学内実習は学生の学修を十分に保障することができたのかを検証した。結果、学生は慣れた環境下で進められたことや想定範囲での実習展開ができ、緊急的及び感染予防という観点から不安が少ない状況下で適切な学習ができた。また、スケジュール化した実習計画の提示は、学生自身は何を学ぶかに注力でき、実践と学びとを関連づけやすかった。2年生においては、介護現場での実習と比べ緊張感の低下があったことや利用者理解の不足、主体的な学習ができなかったと感じていること等が分かった。合わせて、リモート学習の活用の可能性を導きだせた。今回のような緊急的な事案が生じた場合、科目担当教員のみならず、関係する委員会や部署との連携は学生が安心して有益な学習ができる点で必須である。

Keywords : COVID-19, Care Work Practice, On-Campus Training, Learning Outcome

キーワード : 新型コロナウイルス, 介護実習, 学内実習, 学習成果,

1. はじめに

介護福祉学は実学であり、実践的な学問である。介護福祉士養成教育は、介護の根拠となる知識や技術の基本を理論的に学び、基本を踏まえて学内で実際に課題に取り組む。そして、最前線の介護現場での実習において、学内で体得した知識や技術を実践し、自分自身の力量を試し、振り返りや新たな学習課題を明らかにしていく。これらの学習を交互に繰り返すことで学修効果を高める。介護福祉士の教育は、国により1850時間以上の指定された学修が求められている。その内の450時間が介護実習（現場実習）に充てられており、現場での介護実習による知識・技術の修練の重要性が窺える。

2020年、新興感染症に位置付けられた新型コロナウイルス感染症の拡大により、介護福祉士教育の質は保障しながらも教育の形を変容せざるを得ない事態となった。中でも特に最前線の介護現場での学外実習が困難な状況に陥った。

2020年2月28日付厚生労働省発出の「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」¹⁾の中で、学生の学修等に不利益が生じることがないように運営等についての取り扱いが示された。6月1日付同様の文書²⁾では、引き続き慎重な対応を図っていくことが必要であるとの観点から、実習等の弾力的な運用の趣旨や十分な感染予防に留意しつつ進めること等が示された。

これらの通知や他養成校からの情報などを基にしながら、本学でも介護実習Ⅲ及び介護実習Ⅰ－①を全て学内実習に置き換えて実施することになった。そこで、どのように準備して学内実習を進めていったか、学内実習は介護福祉士養成教育として学生の学修を十分に保障することができたのかを検証することとした。

2. 実習施設との協議や学内実習に至るまでの経緯

鹿児島女子短期大学で学内実習に至った経緯を、いつどのような出来事が生じたか、その際の対応及び結果を述べる。

(1) 介護実習Ⅲ (2年生前期)

月日	出来事	対応	結果
7月 初旬	鹿児島市にて新型コロナウイルスによるクラスター発生の情報があつた。		
7月3日 (金)	A 実習施設より、実習受入にあたりPCR検査を受けてもらうことは可能かとの問い合わせがあつた。	①保健所に相談 ②PCR検査が可能な一般の病院に関する情報は収集を行った結果、B病院で実施の可能性があることが分かった。 生活福祉専攻内の実習担当者間で協議した。	①実習先の依頼であると伝えたとこ、検査待ちが多い(130人以上)、無症状の方や濃厚接触者でない方の検査は受付ていないとの回答であつた。 ②担当医師より、抗体検査(費用は5千円)は可能だが、結果には3日～5日位かかり、受ける意味があるかは疑問であること、それでも受けたいのであれば検査は可能であることを確認した。 ①A 実習施設には実習の延期(9月末を期限)をし、施設側の受け入れ可否の判断の目処を9月4日と伝えた。 ②実習予定の他3施設からの問い合わせはないため、実習に参加させる。ただし、実習期間中、施設側から中止等の依頼が1カ所でもあれば、その時点で実習を中断し、9月中の実習再開をお願いする。 ③9月4日までの判断で、9月中の実習実施が困難な場合、学内での実習に切り替える。
7月5日 (日)	C 実習施設より、実習の受入について、可能であれば自粛して欲しいとの意向が示された。	生活福祉専攻内の実習担当者間で協議した。	①7月6日からスタートの実習については全施設とも延期の依頼を行う。 ②学生へも連絡をし、6日は午後から短大へ来るように指示した。 ③全教職員へ、介護実習Ⅲの延期の可能性と実習施設へ延期依頼を行った旨の連絡を入れた。
7月6日 (月)		生活福祉専攻会議にて協議した。	①介護実習Ⅲについては、延期ではなく中止とする。(以下は判断理由) 1)この先が見えない状況で、前期終了時の9月末までに好転するとは限らない。 2)既に実習期間中の非常勤講師の授業は休講としており、通常の講義依頼は難しい。 3)その後の11月から実施する介護実習Ⅳへの日程にも影響がでる恐れがある。 4)厚生労働省からの通知で学内実習を認めており、他の大学や専門学校でも学内で実施した実績がある。 ②10日間の学内実習で対応する。7月7日(火)から学内にて実習を始める。実習計画は別途教員が作成する。 ③学内実習に切り替えた分の必要経費について、予算案を準備する。(ベッドのレンタル、非常勤講師代等)

(2) 介護実習Ⅰ－①（１年生後期）

月日	出来事	対応	結果
7月6日 (月)	D実習施設より、協議の結果、実習受入は困難である。時期を変更することについては、相談に応じるとの連絡が入った。	生活福祉専攻会議にて協議した。	①様々な意見が出たため、再度9日に生活福祉専攻会議を開催し、結論を出すことにした。 ②学生指導として、事前訪問のための電話連絡は、当面の間保留にすることのみを伝えた。
7月9日 (木)		生活福祉専攻会議にて協議した。	①介護実習Ⅰ－①も中止する。（以下は判断理由） 1）前述の理由に加え、感染拡大が報じられる中、7月中の事前訪問の依頼や訪問が困難と思われる。初めての实習であり、事前訪問での準備不足は実習初日からの取り組みに支障が生じる可能性がある。 2）2年生の学内実習において一定の成果が得られている。 ②代替措置として、学内実習とする。今後、具体的に実習計画を作成していく。

(3) 学校養成所等の運営に係る取扱い

学内実習計画作成にあたり、厚生労働省による学校養成所等の運営に係る取扱い²⁾にも触れておく。

- ①学校養成所等にあつては、新型コロナウイルス感染症の対応等により、実習中止、休講などの影響を受けた学生等と影響を受けていない学生等の間に、修学の差が生じることがないように配慮するとともに学生等に対して十分な説明を行うこと。
- ②学校養成所等にあつては、新型コロナウイルス感染症の影響により、教員の不足や施設・設備が確保できない等、十分な教育体制を整えることが困難な場合が生じることが想定される。こうした学校養成所等においては、できる限り速やかに十分な教育体制を整備することが望ましいが、当面の間は、非常勤教員の確保や教室の転用・兼用等により、必要最低限の教育体制を整えることとして差し支えないこと。
- ③学校養成所等にあつては、新型コロナウイルス感染症の影響により実習施設の受け入れの中止等により、実習施設の変更が必要となることが想定される。実習施設を変更する際には、あらかじめ当該変更に係る承認を受けることとされているが、今般の新型コロナウイルス感染症を受け迅速な対応が必要であることに鑑み、承認申請に係る時期については弾力的に取り扱って差し支えないこと。
実習施設の変更を検討したにもかかわらず、実習施設の確保が困難である場合には、年度をまたいで実習を行って差し支えないこと。なお、これらの方法によってもなお実習施設等の代替が困難である場合、実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないこと。その際、学校養成校等は学生等に対し、代替的な学修の趣旨や狙い、到達目標等について十分に説明するよう留意願いたいこと。
- ④上記③の取扱いについては、当面の間、医療関係職種等の国家資格の養成施設として指定する規則に示された実習内容の変更に関する承認申請・届出は不要であるが、今後、実施結果について改めて調査を行うことがあり得るので、しっかりと整理されること。
- ⑤今後、現在の状況が続くことも想定されることも踏まえ、学校養成校等においては、各資格の本旨に鑑み、可能な限り必要な科目（課目・教育内容）が受講できるよう実習や講義の実施方法を工夫されること。例えば、実習を行うに際しては、受講人数を分散させる、受講会場には一度に入れる人数を当該会場の規模に応じた適切な人数のみに絞るなど、感染リスクに配慮すること。

3. 学内実習計画の目標及び計画

実習計画の作成に際し、これまでの学修及び事前指導を活かす観点から、各実習の目標は従来どおりとした。以下は、介護実習Ⅲ及び介護実習Ⅰ－①の学内実習目標・計画（表1、表2）である。

(1) 介護実習Ⅲ

具体的目標①：一連の介護過程の展開を行うことができる。

具体的目標②：各種の住設備機器や福祉用具を知り、その使用方法を理解し、活用できる。

表 1. 学内実習計画 (介護実習Ⅲ) 2020.7.7~7.20

		1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目	11日目
		7月7日	7月8日	7月9日	7月10日	7月11日	7月13日	7月14日	7月15日	7月16日	7月17日	7月20日
9:00 朝礼		火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	月曜日
		安藤	中渡瀬	古山	コン	岩元	一氏	安藤	中渡瀬	古山	コン	岩元
	1	オリエンテーション 実習施設について調べる <small>講師・個人</small>	利用者の情報を収集する (必要な事柄について詳しく調べる) <small>個人</small>	演習(体験) 障害者施設 車いすでの生活 高齢者施設 高齢者体験	利用者の課題を明らかにする <small>個人</small>	中間カンファレンス <small>個人</small>	演習 生活援助技術 <small>個人</small>	介護計画の作成 <small>個人</small>	演習 視聴覚教材 <small>個人</small>	演習 生活援助技術 <small>個人</small>	介護計画の実施のための準備 <small>個人</small>	教員指導
	2	浜崎			浜崎	福永		福永			浜崎	竹中
17:00 記録		入所者の特徴について調べる(心身の状態) <small>個人</small>			利用者の課題を明らかにする <small>講師・個人</small>	介護過程の修正 <small>個人</small>	グループ	介護計画の作成 <small>講師・個人</small>		グループ	介護計画の実施	実習のまとめ
		福永	福永 浜崎	岡村	福永 浜崎 谷川	福永	福永 浜崎 庵木	福永 浜崎 谷川	谷川	福永 浜崎 庵木	福永 浜崎	浜崎
	3	入所者の特徴について調べる(生活の様子) <small>個人</small>	学内のバリアフリーについて調べる <small>グループ</small>	教員指導 竹中	実習施設でのレクリエーション演習(準備) <small>グループ</small>		演習 視聴覚教材 <small>個人</small>	模擬カンファレンス(他職種協働) <small>個人</small>	演習 生活援助技術 <small>グループ</small>	演習 生活援助技術 <small>グループ</small>	介護計画の実施 福永 浜崎	
	4	利用者の情報を整理する <small>講師・個人</small>		利用者の情報を整理する <small>講師・個人</small>			実習施設でのレクリエーション演習(発表) <small>個人</small>				評価・考察 最終カンファレンス	
		福永	谷川	福永	谷川		谷川	福永 浜崎 谷川	福永 浜崎 庵木	岡村 庵木	福永 浜崎 谷川	
	A	福永	谷川	浜崎	福永	谷川	福永	谷川	浜崎	福永	谷川	浜崎
	B	浜崎	福永	谷川	浜崎		浜崎	福永	谷川	浜崎	福永	

Aグループ	古山 中渡瀬 安藤
Bグループ	コン 一氏 岩元

介護実習時間は、9：00～17：00とする。

介護実習期間中の待機場所は、西館203号室とする。

介護実習日誌は、16：30～17：00に記載し、担当指導教員に提出して帰宅する事

遅刻や早退についても実習期間中と同様の取り扱いとする

期間中は、健康観察カードを記載し、不要不急の外出は避け、アルバイト等についても慎重に判断すること

(2) 介護実習Ⅰ－①

具体的目標①：多様な施設・事業所の概要や役割を理解し、利用者の生活や介護職員の業務内容をみて学ぶ。

具体的目標②：コミュニケーション・食事・清潔等の生活支援技術を用いて介護を行い、利用者の特性を知る。

表 2. 学内実習計画(介護実習Ⅰ－①) 2020. 8.3~8.7

		1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
		8月3日	8月4日	8月5日	8月6日	8月7日
9:00 朝礼		月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
		福元・温	三宅・ハオ	松元	峰元	四元
	1	オリエンテーション	訪問介護サービスについて学ぶ	演習(体験) 高齢者体験	福祉車両について学ぶ	グループホームで暮らす人を理解する
	2	実習施設について調べ てまとめる	福永			宮園・(福永・浜崎)
17:00 記録		浜崎	調理実習	岡村・庵木	谷川・竹中	音楽活動に参加する
	3	利用者の特性について 調べてまとめる		高齢者を理解する 視聴覚教材：竹ちゃん 一座	レクリエーションへ参加する	実習のまとめ
		谷川	福永・庵木			福永・浜崎
	4	挨拶・話し方・言葉遣い・敬語について	掃除(演習)		※2年生の参加あり	最終カンファレンス
		有馬	福永・庵木	浜崎	谷川・庵木	谷川・福永・浜崎
	A	浜崎	福永	谷川	浜崎	福永
	B	谷川	浜崎	福永	谷川	浜崎

Aグループ	福元 三宅 温 ハオ
Bグループ	松元 峰元 四元

○介護実習時間は、9：00～17：00とする

○介護実習期間中の待機場所は、西館204教室

○実習記録は16：30～17：00までに記載し、担当教員へ提出し帰宅すること
(17：00までに提出できない場合、その旨を報告し、翌日朝提出すること！)

○遅刻・早退は、実習期間中と同様の取り扱いとする

○実習期間中は、健康観察カードを記載し、不要不急の外出は避け、アルバイトについても慎重に判断すること

4. 学内実習における成果

(1) 2年生の意見

学内実習を終えた感想、学内実習の中で関心が高かった内容については以下のとおりである。

- ・想定した範囲で進んだ。しかし実際は違う（利用者との関わり方は悩む）ため、経験は限られたのではないかと。
- ・利用者理解として得られたものは違ったのではないかと。（例えば、障害の理解など）
- ・緊張感の違いはあったと思う。精神的・時間的な負担を考えると、慣れた場所での実習であった。
- ・実習記録において、内容が偏っていたように思う。毎日記録をまとめるに至る材料が不足していたように感じた。
- ・実習記録において、学外であると自ら収集しなければならない点が違った。
- ・高齢者疑似体験により、高齢者の身体機能を体感することができた。
- ・生活支援技術の復習ができた。（移乗介助・食事介助など）
- ・レクリエーションの企画・準備、実施ができた。
- ・介護食を実際食することができた。介護食が美味しいことが分かった。
- ・DVD視聴により脳性まひを理解することができた。

(2) 1年生の意見

実習反省会で出された意見は以下とおりである。

- ・高齢者疑似体験において、階段の昇り降りや歩行の際、介護者は腕だけではなく体を支えることで、利用者は恐怖心が無くなり安心感を得られると思った。
- ・福祉車両の演習で、利用者が乗車している際のシートベルトのかけ方や扉の閉め方に注意することを学んだ。また利用者が安心して乗車できるかは、声かけが大事であることが分かった。
- ・聴覚に障害がある方に話しかける際、利用者を驚かせないように視野に入りながら近づいていくことが大事であると分かった。
- ・畳の掃除の仕方が分からなかった。演習を行ったことで勉強になった。
- ・利用者、利用者家族、施設の見学者、業者の方などそれぞれにどのような挨拶をするかをマナーに関する講義の中で考えた。相手の立場に合った言葉を考えるよい機会であった。
- ・2年生によるレクリエーションにおいて、展開の中で利用者の名前を呼ぶことや転倒しないような工夫がなされていた。利用者のことを一番に考え、一緒に楽しんでいることがよいと思った。

5. 考察

今回の学内実習における成果について考察する。

実習指導教員らを中心とし、短時間ではあるが試行錯誤の末、スケジュールを組み立て、そのスケジュール化した実習計画に則って、順調に学内実習を進めることができた。その間、感染予防策を講じながら健康管理に努め、指定の時間数で学修できたことは一定の成果があったと考えられる。学生の感想にもあるとおり、場所やクラスメイトといった慣れた環境下で進められたこと、想定できる範囲での実習展開ができたことは、今回の経緯から考えると不安が少ない状況の中で適切な学習ができたと思われる。

また、スケジュール化した実習計画を提示したため、ある程度の学習項目や時間は明らかになっていた。その中で、学生自身は何を学ぶかに注力すればよく、実践による体験と学びとを関連づけやすかったのではないだろうか。毎日実習を始める前、自身で立案した1日の実習目標を皆の前で発表し、実習の中で何を明確にするかは具体的であった。合わせて、立案した実習目標を達成するために何をし、何を考え、何を学べたか、今後への課題等をまとめる実習記録の内容も充実していた。これらのことから、緻密な実習計画の提示は一定の効果があったと考える。

半面、慣れた環境下での実習は介護現場での実習と比べ緊張感の低下があったことや利用者理解の不足、主体的な学習とは言い切れないのではないかと感じていること等が分かった。これらは、2年生への意見聴取の中で聞かれた内容であり、学外での実習経験と比較しての発言である。今後の新型コロナウイルス感染拡大状況を考慮すると、試行錯誤で緊急に立てた学内実習計画については、そのメリット、デメリットを再考し、より良い学内実習を考えてみる必要があるだろう。

2年生による学内実習において関心が高かった内容をみると、利用者理解と生活支援技術関連への回答であった。回答

にある内容については、既に授業の中でも取り入れたものであり、初めて学習したという点での関心の高さではないことが推察される。学生の意見の中には、「介護技術に自信が持てなかったり、学んできた内容を忘れていたりすることを自覚できた。介護技術の根拠や方法など再確認し習得できるように努力していきたい」や「利用者にとって最善のケアができるように、介護技術を高めるとともに、何が必要かを考え、学び、実施できるようになりたい」があった。少なくとも、自身の学びの再確認や不足を補うことで更に理解度を高めたいという理由で高い関心を持ったことが分かる。また、知識が増加することに比例して生活支援技術を介護実習などの実践で高めたいと思う気持ちは高くなるが、その機会が現状では十分に授業では補うことが出来ていないことも考えられる。これらのことから、学内での授業において科目間での情報共有を図りながら、復習や修得度を測る等の機会を設けることが重要であると考ええる。

1年生は、学内では体験できない「福祉車両での昇降の実際」や「決められた食材での調理」、「和室の掃除の仕方」などを取り入れたことで、初めての介護実習が学内となったとしても、通常の授業とは趣の異なった内容であったことから、次への実習へつなげることが出来ると考える。

介護福祉士養成教育の中の介護実習は、介護の分野に位置づけられる。介護実習のねらいとして、以下の2つが示されている。³⁾

- ①地域における様々な場において、対象者の生活を理解し、本人や家族とのコミュニケーションや生活支援を行う基礎的な能力を習得する学習とする。
- ②本人の望む生活の実現に向けて多職種との協働の中で、介護過程を実践する能力を養う学習とする。

今回の学内実習の学習成果として欠けた点は、利用者及びその家族が実際にはいないということが挙げられるだろう。また、実際の支援に携わっている介護福祉士や介護職員、その他関係職種の方々と関わる機会がないという点も加わる。介護計画作成にあたり、実習目標をでき得る限り高い達成にすべく、実際の利用者及び家族、関係職種の存在を意識できるよう、事例の提示や自身が立案した介護計画に則った実施、ケースカンファレンス等を取り入れた。2年生へは自身が立案した介護計画に則った実施を教員及び学生らが評価をするという学習も設けた。前述した2つのねらいを学習するためには、介護現場での経験に勝るものはないが、介護が必要となる方が具体的には存在しなくとも、これまでの学習により利用者を想像しながら学習を進めることも今回のような緊急な場合では一定の効果はあると考える。さらに、今回の学内実習を通して、学生がどのように情報収集をまとめ、計画の作成、実施までの一連の介護過程の展開に取組むかを確認することが出来た。このことから、今後、情報の追加や実際のカンファレンスでの要点をおさえた進行、準備にかかる時間や実施する展開力など、介護実習で実践するために必要な内容が明らかにできたと考える。

他の養成校では、介護現場とのリモート学習を一部取り入れたとの話を伺った。今回、1年生の実習において非常勤講師が勤めるグループホームとリモートにて利用者と学生とが対話することを計画していた。調整が出来なかったため、実際には行えなかったが、学生は利用者との関わりを持つことが出来ることを楽しみにしていた。このことは、講師による体験談や映像では経験できないことを、リモートであってもリアルタイムで体感することが勉強に対する意欲の向上や習得した支援技術等の再確認にもつながることから、リモートでの学習の活用の可能性は大きいと考える。

2020年度は教育課程上学外での実習を必須とする多くの介護福祉士養成校が、現場での実習の機会を変更せざるを得ないことになった。介護福祉士に限らず、今後は多くの専門分野において、実習の進め方や方法、実習成果の確認・検証などに関する研究がなされるだろう。こうした研究成果について、養成校間での連携を計りながら、情報収集を行い、課題を共有し、学生指導に活かしていきたい。

今回の新型コロナウイルス感染拡大に対する緊急対応のような学外・学内実習の変更は、全国の養成校はもちろん、20年以上養成教育を担ってきた鹿児島女子短期大学生活科学科生活福祉専攻においても未経験の事案であった。すなわち、実習担当教員はもちろん関係教職員、教務・学生支援関係部署の負担（新たな経費支出も含め）は想像以上に大きかった。この経験を活かし、特に緊急予算面での国の援助や、柔軟に対応できる学内予算費目の創設など、また素早く判断できる学内組織体制なども必要になってくると考えられる。今回のような緊急事態では、本学においては、学外実習委員会や実習センターとの迅速なやり取りや的確な対応の決定と実施が望まれる。

6. まとめ

- ①介護実習を学内での学習に切り替えるにあたり、各実習目標は同様のものを設定した。実習計画はある程度スケジュール化し、学習内容と時間設定を示した。
- ②学生は、場所やクラスメイトといった慣れた環境下で進められたこと、想定できる範囲での実習展開ができ、緊急的及

び感染予防という観点から不安が少ない状況の中で適切な学習ができたと思われる。

- ③スケジュール化した実習計画を提示したため、学習項目や時間は明らかであった。その中で、学生自身は何を学ぶかに注力すればよく、実践と学びとを関連づけやすかったと考えられる。
- ④慣れた環境下での実習は、介護現場での実習と比べ緊張感の低下があったことや利用者理解の不足、主体的な学習とは言い切れないのではないかと感じていること等が分かった。
- ⑤学生の関心が高かったことは、利用者理解と生活支援技術関連を挙げていた。自身の学びの再確認や不足を補うことで更に理解度を高めたいという理由で高い関心を持っていることが分かった。1年生では、学内では体験できない内容を取り入れたことで、初めての介護実習が学内であっても、通常の授業とは趣の異なった内容であったことから、次への実習へつなげることが可能だと考えられる。
- ⑥緊急的な事情が生じた場合、科目担当教員のみならず、関係する委員会や部署との連携は学生が安心して有益な学習ができるという点で必須である。

7. 終わりに

冒頭に述べたとおり、介護福祉士養成教育においては学内での講義や演習を通じて利用者理解や支援方法といった基本を学び、その学びを深めるために介護現場で実習を行うという、養成校と現場で交互に繰り返しながら学修していく。その先には、専門職として社会的な期待の表れとしても表現されている“求められる介護福祉士像”を具現化することが大切になる。

新型コロナウイルス感染症の影響から、今回は介護現場で実習として学習する機会を学内で補った。介護福祉士養成教育のあり方からすると、介護現場での実習の機会のほとんどが学内での学習に切り替わることは、質保障の観点から疑問は残る。しかし、今回のような事態が生じた場合、学生の学びを止めるわけにはいかないため、知識・技術の検証や向上を図れる学内代替実習を経験できたことは我々養成教育に携わる教員においては一定の収穫があった。この経験を学内での通常授業と実習に上手く関連づけていきたい。

本研究では、介護福祉士養成に必要となる実習施設との連携や課題については触れていない。改めて情報収集や課題整理を行う機会を設け、介護福祉士養成においては必須となる実習施設との強固な連携のさらなる深化へも努めていきたいと考えている。

謝辞

今回、有意義な学内実習を行うことができたことは、有馬恵子教授、中村礼香准教授、非常勤講師である岡村友美先生や宮園真紀先生のご尽力の賜物である。また、実習計画を変更せざるを得ない状況に際し、実習センター長の横峯孝昭准教授はじめ職員の皆様が迅速に対応して下さいました。この場をお借りして感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 厚生労働省社会・援護局他、「新型コロナウイルス感染症発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」, 2020年2月28日
- 2) 厚生労働省社会・援護局他、「新型コロナウイルス感染症発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」, 2020年6月1日
- 3) 公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会,「介護福祉士養成課程新カリキュラム教育方法の手引き」, 2019年3月

(2020年12月25日 受理)